

1) 研究目的と内容

「環境文化創成プログラム」は、地球環境問題の現場に作用する諸力の複雑な交錯と結合の過程を、学際的、超学際的手法によって解き明かす。とりわけその過程における文化の役割を射程に入れて、持続可能な未来社会における人と自然の新たな相互関係性を展望することを目的としている。

地球環境問題という現代社会が直面する深刻な課題に私たちはどのように向き合い、どのようにして問題解決のための一步を踏み出すことができるのか、と問われると、地球が直面している環境危機（温暖化、森林消失、大気汚染など）に関する正確で厳密な測定と分析にもとづく科学的根拠を示すことで、人々の考え方を正し、行動の変容を導き出すという答えが想定されるだろう。

しかしながら、科学的に正しい知識の獲得は大変重要な要素だが、それだけで人々の価値観や行動様式が自動的に変容することはない。なぜならそこには人々の生き方をいい意味でも悪い意味でも規定している文化の要素が作用しているからだ。したがって、地球環境問題の解決のためには、この文化の問題を正面から取り上げる必要がある。こうした視点で文化の創造力を捉え直し、地球環境問題の解決と連動する環境文化の創成を目指すのが本プログラムのエッセンスである。その視点を言い換えると「科学と文化の対等な対話」ということができる。

これまでの地球環境問題に関する研究では、学際的超学際的を標榜していても、最終的には科学的知識の絶対性（優越性）を無意識の前提にするスタイルが主流であった。そこにおいては、科学的知識に合致する、在来知や伝統知は「再評価」されるものの、合致しないものは、「非科学的」「迷信」とみなされ否定的な評価をされてきた。

こうした状況において、科学を絶対化する科学至上主義でも、文化的価値を上位におく伝統賛美主義（反科学主義）でもない、両者がともに対等に対話し両者がともに変容をとげるような関係こそが必要とされる。本プログラムが創成を目指す環境文化はこうした関係性を生み出すものなのである。

ミッション

地球環境問題のローカルな現場に現れる多様で異質な要素の間の複雑な連関や葛藤を対象にして、科学知による認識と分析を基盤としつつ、個々の社会が生成してきた「在来知」との対話と連携、その相互変容を通して、環境を保全し劣化に歯止めかけるための総合的な環境文化の創成を展望する。多様なアクター（地域住民、科学者、行政、NPO、国際機関など）が、どのようにして葛藤と向き合い、自立共生的な関係を構築し、相互に協働することで、人と自然の新たな相互関係性をつくりあげていくことができるかを明らかにする。

このミッションを実現するために、本プログラムでは、地球環境問題の現場、あるいは持続可能な社会の構築という議論の中にいかにして「文化」の視点を取り入れることができるかについて探求を試みる。文化の視点というのは、グローバルやナショナルといった次元だけではなく、もっと身近で親密なそこで共同して生きる人々のまとまりを重視するということであり、そこで人々がいかによりよく生きるかという価値（生き方）を重視するということを意味している。その中には、科学的知見とは異質な価値も当然含まれている。こうした科学知と対立する様な価値に対して、矯正するのでも、賛美承認するのでもない、相互に変容しうるコンヴィヴィアル（異なったものが相互に特性を活かしてつながる様）で創造的な視点を作り出す必要がある。

本プログラムは、こうした環境に対する多様な知識相互のコンヴィヴィアルな関係性に注目し、それを活用することで、環境と環境問題に向き合う新しい文化（それを環境文化と呼んでいます）を創成することに貢献する。

2) 本年度の課題と成果

2024 年度から「環境文化創成」プログラムは、ようやく三つの FR プロジェクトが揃って活動を開始する

ことになった（Fashlocs の開始は 7 月 1 日、SceNe は 4 月 1 日）。このプログラムは、2022 年にミッションステートメントによる IS, FS の公募を実施し、幾度も研究会やセミナー、報告会を積み重ねて、それぞれの研究を深化させ、所内と所外の選考委員会によって、三つのプロジェクトが選ばれたのである。

環境文化創成プログラムの問題意識は、先述した通り、地球環境問題の解決のためには、科学的知識だけでは十分ではないということ、人々の価値観、生き方まで踏み込むためには、科学知とは異質な知や実践との、対等でコンヴィヴィアル（互いを活かして自立共生する）な連携・協同が必要だということだった。

人々の行動を変容させるには、法や制度に頼ることも必要なことは言うまでもない。しかしこのプログラムでは、現場の生活世界を基点にした「底辺からのアプローチ」を基本にしている。科学的に正しい知識や政治的に正しい指示を上から、外から与えるだけでは、現場の現実は変わらない。それが地球環境問題にとっての文化の重要性であり、本年度は、この考え方に沿って三つの FR がそれぞれの持ち味を発揮して、科学知に加えて、もう一つの知や実践の様式との接合・融合・連携の可能性を探索することでこのプログラムの目的に貢献する試みを開始した。

有機物循環プロジェクトでは、生活知と科学知の連携を、SceNE プロジェクトでは、アートと科学知の融合を、そして Fashlocs プロジェクトでは、在来知と科学知の共創によって、地球環境問題における新しい知識と文化の創成を目指すための土台作りと予備的・実験的アプローチを行うことが本年度の課題となり、それを実行した。

有機物循環プロジェクトでは、これまでの計画を一部変更して、都市の生活ゴミの規模と有機物循環性の高さなどから、アフリカサイトを拡充し、日本以外の他地域を縮小することとし、従来のニジェールサイト、ザンビアサイトに加えて、ウガンダサイト、ガーナサイト、ジブチサイトに拠点を構築する準備を進め、それぞれのサイトに特有の有機ゴミの収集とコンポスト化、さらにその活用のための実験的サイトの準備と検討に着手しすでに成果をあげつつある。日本では、家庭ごみや食品廃棄物の循環を目指した、地球研ドライコンポストの創作と普及が成果をあげつつある。京都府内の小学校で、動物園、ホテル、企業、農業者、市民など多様なアクターを横断して、生活の必要と便宜を核心とする生活知の柔軟性と状況対応性は、アフリカ社会における実践とも通じる質を持っていることも明らかになった。

SceNE プロジェクトでは、アート、とりわけ演劇と科学との対話と融合について、喜界島のサンゴ礁科学研究所を拠点とした実験的実践を更に進めた。昨年度は、喜界島を含む奄美群島の日本復帰の年、1953 年の特定の日を基点として人、社会、サンゴの交錯を描いた「ユラウ」制作と公演を通してその実験を行ったが、今年度は、「5 万年前の喜界島と現在の能登を行き来し、サンゴが唄う演劇」として「海のセレナーデ」を、青年団/江原河畔劇場と共同で制作し、金沢 21 世紀美術館の地球研デイズのイベントの一つとして公演した。サンゴ礁科学の最先端の知見をベースに演劇的想像力によって、時間のオーダーを超越して人、社会、自然を描いた作品は、国内外の参加者に深いメッセージと大きな感銘を与えた。

Fashlocs では、地域—在来知と科学知の共創について、プロジェクトの主要ゴールである熱帯雨林における野生生物の持続的な管理の領域から予備的な知見を探索した。メインサイトである、アフリカの熱帯雨林の狩猟採集民社会（カメルーン・バカ社会）および南米アマゾン流域の熱帯雨林で暮らす先住民社会（コロンビア・アマゾン）における、調査体制の構築および拠点の整備を進める中で、地域—在来知と科学知の複雑で多様な関係性の一端を確認することができた。その点の解明は、このプロジェクトが切り開く地平は、たんに野生生物の生息個体推定のための知識・技術にとどまらず、ブッシュミートをめぐる文化的価値や消費性向、流通システムの変容など、社会の現代的再編成の全体像に迫るものであることを示している。

3) 今後の課題

2024 年度の成果を踏まえて本プログラムの今後の課題については以下の三点があげられる。

1) 現代世界において支配的な知の地位にある科学知に対するもう一つの知の様式である、生活知、アート、在来知と、科学知との接合、融合、連携、共創という関係性を総合的に捉える理論的視座の確立。

新しい「環境文化」の土台は、「科学知」とこうしたもう一つの知の様式との対話の構築にあるが、両者は単に相互補完的にスムーズに接合するだけではない。ときに両者は、一見非和解的に対立・敵対する場合も少なくない。そうしたケースにおいて、最終的な判断をくださるのは、つねに科学知であることが一般的であった。そうではない第三の可能性についての理論的検討が重要となる。それぞれの事例の分析を通して、そのための予備的作業を行うのが来年度の課題となる。

2) 三つのプロジェクトが取り組む、もう一つの知の様式との接合・連結（有機物循環）、融合（SceNE）、共創（Fashlocks）にあたってたち現れる困難の同定と超克の方法の探求。

2) で指摘した2024年度の活動で明らかになった問題点を解決するための理論的枠組と具体的な解決の実践を確定し実行する。

3) プログラム内の対話と相互補完体制の構築の追求

三つのプロジェクトがプログラムにおいて果たすミッションを共有しながら、共通の目標である科学知ともう一つの知の様式の接合によって、ひとびとの価値観や生き方の変容を引き起こすためには、生活知、アート、在来知というオルタナティブな知相互の連携と補完を追求する必要がある。そのために、来年度早い時期にプログラムセミナーを実施し、三つのプロジェクトが相互にクロスして深い議論と対話ができる場をつくる予定である。